Vol. 32 No.1
2014.5.1

REIMEI
黎明

鹿児島県歴史資料センター
黎明館だより

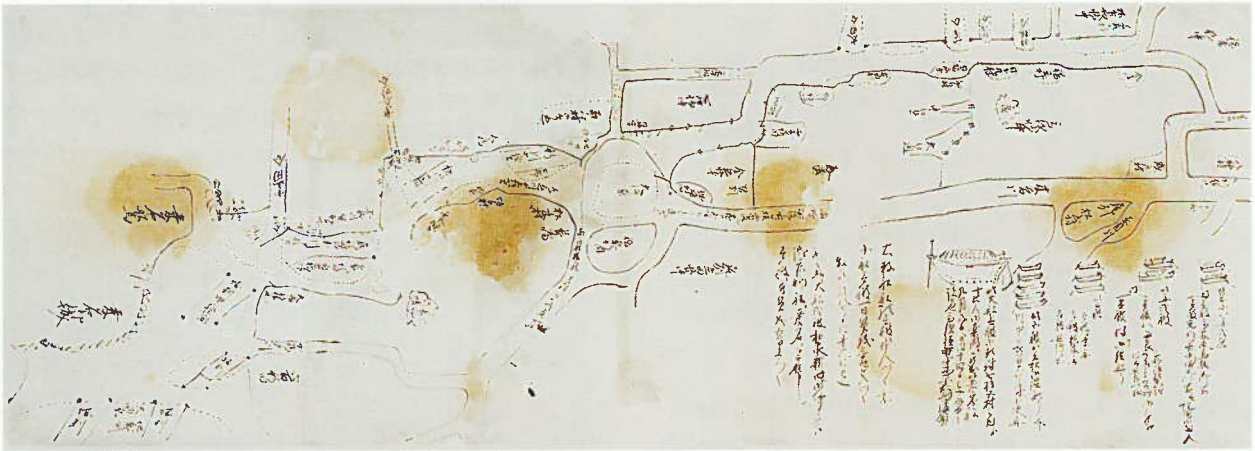
Kagoshima Prefectural Museum of Culture Reimeikan

宝暦治水260年記念企画展

宝暦治水（ほうれきちすい）と平田靱負（ひらたゆきえ）

― 薩摩藩家老の系譜 ―

平成26年５月20日（火）～７月27日（日）



「木曽川川通（かわどおり）検分絵図」（海津市歴史民俗資料館所蔵）

宝暦（ほうれき）３年（1753）12月，木曽三川（きそさんせん）（木曽（きそ）川・長良（ながら）川・揖斐（いび）川）の御手伝普請（おてつだいぶしん）が薩摩藩に命じられました。薩摩藩は，家老平田靱負（ひらたゆきえ）（正輔（まさすけ））を総責任者として，多くの人員と多大の経費を費やし，慣れない自然環境と地域社会の利害，当時の社会制度の制約の中でこの大事業を遂行します。

宝暦４年２月に始まり，同５年５月に完了した宝暦治水（ほうれきちすい）は，当初の予想をはるかにこえる難工事となりました。多くの人命が失われ，藩財政にも深刻な影響を与えた事業でしたが，この事業に関わった人々の労苦は，明治・大正時代の顕彰（けんしょう）活動によって明らかにされるまで，周知されませんでした。

平成26年（2014）は，この宝暦治水の開始から260年に当たります。本企画展はこれを記念し，宝暦治水事業と「薩摩義士（さつまぎし）」の顕彰活動，家老平田靱負について取り上げるとともに，江戸時代に藩政を担った代表的な家老の活動を通して，いわば薩摩藩家老の系譜，鹿児島の先人の姿を紹介します。

資料をご提供いただきました所蔵者の方々をはじめ，ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

「平田靱負銅像」（鹿児島市平田公園）

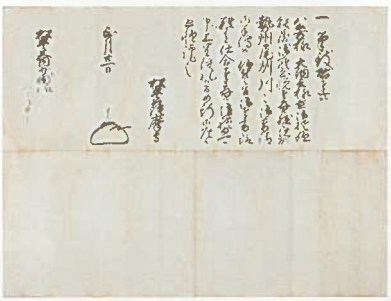
第1章　宝暦治水

第１節では，濃尾平野の構造や宝暦治水以前の木曽三川，地域共同体としての輪中の特色など，南九州とは異なる自然環境と複雑な支配，利害関係などについて，主に写真パネルで紹介します。

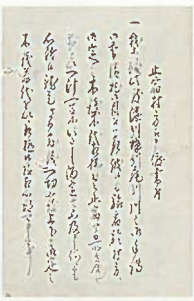
「濃尾三川流域輪中之図」（大垣市立図書館所蔵）

「宝暦以前の高須輪中絵図」（海津市歴史民俗資料館所蔵）

第２節では，宝暦３年（1753）12月に命じられ，翌年２月に始まり，同５年に完了した治水事業の経緯を展示します。江戸時代の治水技術を用いながら，４つの工事区域に分けられた宝暦治水事業が，それぞれどのような状況で展開されたのか，特に難工事とされた大榑川洗堰や，油島地先の締切工事を中心に，絵図や関係史料，写真パネルを展示します。



「島津重年書状」（尚古集成館所蔵）



「止宿方江申渡書付」

第３節では，宝暦治水以後として，事業完了を報告後，相次いで亡くなった総奉行平田靱負と藩主島津重年についてふれ，宝暦治水に関する薩摩藩の記録や，現在の関係史蹟なども紹介します。

第４節では，特に明治時代にオランダ人デ・レーケの指導で行われた大改修と，現地で活発化した顕彰運動とその全国的展開，大正５年（1916）12月の平田靱負への贈位以後，活発となる鹿児島での顕彰の動きと昭和時代の顕彰活動などについて紹介します。

「書付（薩摩守参勤通路筋普請場見分ニ付）」
（名古屋大学附属図書館所蔵）

「丸十紋入文箱）」
（黎明館保管・個人蔵）

「薩摩義士に関する一札」
（鹿児島県立図書館所蔵・原資料海蔵寺所蔵）

「大榑川口洗堰図」
（鹿児島県立図書館所蔵）

「治水雑誌（第一・二号）」

「東郷平八郎筆薩摩義士常夜灯碑文下書」

第２章　家老平田靱負と平田家

宝暦治水に当たって，御手伝普請を命じられた薩摩藩を代表した家老平田靱負（正輔）。平田家に伝えられた系図や文書などを展示して，同家の系譜，その後の平田家についても紹介します。

「伝平田靱負肖像画」（個人蔵）

「島津吉貴加冠状」（個人蔵）

「東條昌安実名勘考書」（個人蔵）

「平田靱負正輔書状」

トピック　薩摩藩の技術と奄美群島

ここでは宝暦治水以外の助役（御手伝普請）の事例と共に，鹿児島の城下絵図や国絵図などを展示します。

南九州の地は，中世以来，対外交易と深く関わり，また島津氏は琉球との特別な関係を強く主張していきます。城下町鹿児島をはじめ，薩摩・大隅の各港には多くの船が訪れ，さまざな文物がもたらされ，人々が往来し，定住する知識人もいました。

江戸時代はじめに琉球王国を支配下においた薩摩藩は，奄美群島を直轄とします。ここで生産された黒砂糖は，後の薩摩藩の財政に大きな意味を持ちました。薩摩藩がもっていた，様々な情報ルートや技術，そして黒砂糖や琉球口貿易などによる収入が薩摩藩を支えていきます。

「通行手形」
（黎明館保管・個人蔵）

「本藩人物誌」

第３章　薩摩藩家老の系譜

はじめに，初期の名将と家老の系譜として，新納忠元から伊勢貞昌，島津久元などについて展示します。次に，様々な家老の姿として，まず排除された家老として「本藩人物誌」に国賊として記載されている平田増宗，比志島国隆，島津久慶を取り上げます。彼らが断罪された背景には，江戸時代初期の薩摩藩のかかえる様々な課題がありました。続いて，教育や産業振興に活躍した家老，自分の家の維持や職務の遂行に苦労した家老の例も取り上げます。

早い時期から藩には多くの借銀があり，財政を担当した家老にもこの問題が重くのしかかります。藩政に対する危機感から改革をはかり，文化朋党事件で処罰された樺山主税などの犠牲者も出しました。宝暦治水以後の借銀や藩財政圧迫に関わる史料，そして島津重豪と斉興の信任を得て財政改革を成功させながら，非業の最期を遂げた家老調所広郷を紹介します。最後には，幕末に島津久光のもとで活躍した，家老小松帯刀と桂久武関係の史料を展示します。

「島津久馮外四名連署書状」

「調所広郷肖像画」
（黎明館保管・個人蔵）

※期間中，一部展示替を予定しています。

関連行事①展示解説講座（学芸講座を兼ねます）

「薩摩藩家老の系譜」

日　時：６月１日（日）　13：30～15：00
会　場：黎明館３階　講座室
講　師：黎明館学芸課長　林　匡

関連行事②学芸講座

「新しい時代の「宝暦治水」像」

日　時：６月29日（日）　13：30～15：00
会　場：黎明館３階　講座室
講　師：黎明館調査史料室長　内倉昭文
※講座は無料，申込みは必要ありません。
※講座終了後，企画展示室で解説を行います。
　その際は，常設展示団体入館料が必要です。

平成26年度の主な事業について

平成26年度，黎明館が実施する主な事業について，その概要をお知らせします。

1　自主企画事業

(1) 黎明館企画特別展

「南からみる中世の世界
～海に結ばれた琉球列島と南九州～」(仮)
(9/27～11/3，第２特別展示室)

平安時代後期から鎌倉，南北朝期（11～14世紀前半）の南九州・琉球列島に視点を置き，遺跡や遺跡出土の貿易陶磁や国内産交易品，交易・交渉・支配に関わる歴史史料を手がかりとして，南九州と琉球列島を取り巻く，ひと・もの・文化の交流を紹介します。

(2) 教育普及

ア　講演会・シンポジウム
（午後１時半から講堂）

本年度は美術工芸の分野に関する講演会を実施します。

○７月６日(日)
「鹿児島の仏像について」(仮)
文化庁主任文化財調査官　奥　健夫　氏

【企画特別展関連】
○10月上旬
「中世南九州とグスク時代の琉球列島」(仮)
琉球大学　教授　池田 榮史　氏
「日宋貿易と琉球列島」(仮)
神戸女子大学　教授　山内 晋次　氏

他に企画特別展に関するシンポジウムも計画しています。

※１月又は２月に，東京大学史料編纂所教授の講演が予定されています。

イ　ふるさと歴史講座（午後１時30分から講座室）

鹿児島の歴史と文化を考える講座です。今回は，歴史の分野に関する講座となります。

○１月17日(土)，18日(日)
「西洋列強の進出と薩摩藩の近代化」(仮)
尚古集成館　副館長　松尾 千歳　氏

ウ　古文書講座（午後１時30分から講座室）

黎明館学芸専門員による古文書解読講座と県内有数の歴史研究者による歴史・古文書の魅力に触れる講座を開催します。

○古文書講座Ⅰ　5/24～6/28(土)６回
古文書解読を中心に，定員30人程度

○古文書講座Ⅱ　11/8～12/20(土)７回
古文書と歴史の魅力を語る。定員50人程度

エ　学習支援講座　エンジョイ黎明館

○「常設展示の世界―学習支援のための鹿児島の歴史と文化」(8/6，8/7)
学校の教職員を対象として，学習の場における黎明館展示の活用を図ります。

○「歴史編」(偶数月)・「文化編」(奇数月)
黎明館展示解説員が常設展示を時間をかけ，丁寧に解説します。今年度から「歴史編」と「文化編」に分けて，リニューアルしました。何回でも受講できます（毎月第２土曜日，午前10時から11時30分，常設展示場）。

○「学芸講座」
学芸専門員が調査・研究したそれぞれの担当分野に関して講座を開催します。6/1，6/29，9/13，10/4，10/25，12/7，1/24，2/7，3/14
（午後１時半から３時，講座室）

2　常設展示運営事業

(1) 企画展（企画展示室）

黎明館が収蔵する多数の資料の中から，常設展で見る機会の少ない収蔵資料を中心に，年４回の企画展を開催します。

ア　「～宝暦治水260年記念～宝暦治水と平田靭負―薩摩藩家老の系譜―」(5/20～7/27)

イ　「新たな国民のたから―文化庁購入文化財展―」(仮)(8/5～8/31)

ウ　「おもちゃ絵展―子どもたちの浮世絵―」(仮)(9/9～12/14)

エ　「生誕120年　日本画家瀬尾南海の世界」(仮)(12/23～4/12)

(2) 体験学習

郷土の玩具，楽器等に手を触れ，鎧や兜を着用する等の体験ができます。また，もの作り等の体験講座を年４回開催します。

○６月22日(日)和装本づくりに挑戦しよう
○７月20日(日)薩摩焼をつくろう
○７月26日(土)絵地図でめぐる鹿児島城下
○12月21日(日)正月を楽しもう

3　資料収集整備事業

(1) 資料調査収集協力員

県内各地に21人の資料調査収集協力員を委嘱し，展示・収蔵する資料の情報を得ます。

(2) 寄贈・寄託・購入による資料の受入れ

(3) 資料の保存のためのくん蒸

(4)『黎明館調査研究報告』第27集の刊行

4　県史料編さん事業

(1) 刊行

「旧記雑録拾遺　地誌備考二」
「名越時敏史料五」

(2) 編集

「旧記雑録拾遺　地誌備考三」
「名越時敏史料六」

※都合により日程は変更になることがあります。

常設展示のみどころ50

後醍院真柱関係資料

後醍院真柱（1806～1879）は幕末から明治初期に活躍した，薩摩藩出身の国学者，神官です。

今回，真柱のご子孫から書幅や古文書などの資料が黎明館に寄贈されました。これを記念して２階常設展示場で資料の一部を紹介しています。

後醍院家は，伝承では後醍醐天皇の皇子である懐良親王が西国へ下向した際，肥後国の菊池氏の女性との間に出生した男子・後醍院良宗の子孫とされます。後醍院家は戦国時代に八代で島津義弘の家臣となり，以後島津家に仕えました。

【後醍院家系図】

冊子になっている系図は真柱の息子・良茂がまとめたものです。後醍醐天皇に始まり，真柱に至る系図が記されています。

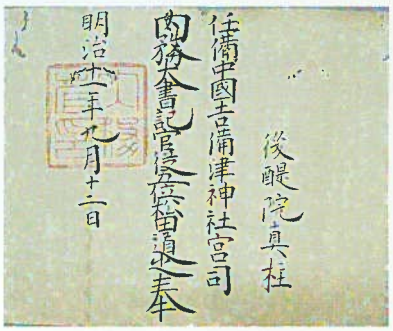
真柱は初名を隆風，通称は彦次郎で，自凝舎などと号しました。国学を学び，幕末には藩校・造士館で教鞭を執りました。造士館は８代藩主・島津重豪が安永２年（1773）に設立した藩校で，当初は朱子学を中心に教授していましたが，11代藩主・島津斉彬は実学の振興を図りました。真柱が任命された助教は，安永６年（1777）に講堂学頭の名で設置され，天明６年（1786）に助教と改称されました。最高責任者の教授に次ぐ地位です。

【後醍院真柱　造士館助教辞令】

【後醍院真柱写真】

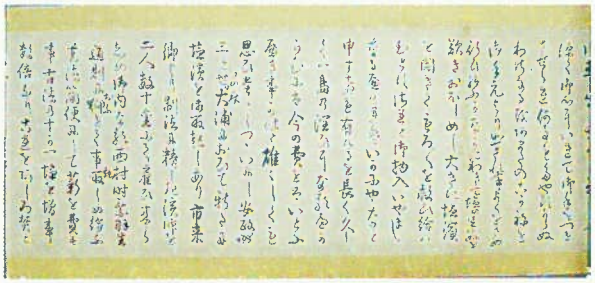
国学者の真柱は，幕末の薩摩で行われた廃仏毀釈の中心人物の一人とされています。維新後は明治政府の皇学所御用掛や教部省の役職を勤めています。今回寄贈の資料に白い髭を蓄えた真柱晩年の写真があります。後醍院家の親戚に残された資料では，この写真は明治８年（1875）10月９日に東京で撮影されたとの記録があります。

教部省が明治10年１月に廃止されると，同年11月に史誌編纂御用掛として岡山県に赴任し，翌年吉備津神社の宮司に任命されました。



【吉備津神社宮司辞令】

真柱が亡くなった後，家族によって真柱自筆の書簡や文章の一部が巻子に仕立てられました。これが「自凝舎遺稿」と呼ばれる資料です。展示は種子島家に嫁した９代藩主・島津斉宣の娘（のち松寿院）が行った塩田開発について記したものです。この中では松寿院が塩田の技術者を招聘し，生産向上に努めたことが紹介されています。



【自凝舎遺稿　巻六】

（前学芸専門員　新福大健）

調査研究ノート

石清水八幡宮寺と島津氏

京都の南に位置し，国家第二の宗廟と謳われた石清水八幡宮寺は古くから南九州と関係が深かった。古代から中世にかけての石清水八幡宮寺は，正八幡宮・八幡新田宮等の別宮を拠点として，これらの別宮領を間接的に支配した。いわば，荘園制的収取機構に依拠した支配と規定できる（拙稿「石清水八幡宮寺の別宮支配について—大隅国正八幡宮の場合を中心に—」，『黎明館調査研究報告』第23集，2010年・「石清水八幡宮寺による南九州の荘園支配」，地方史研究協議会編『南九州の地域形成と境界性—都城からの歴史像—』雄山閣，2010年）。

石清水八幡宮

しかし，このような関係も実質的には14世紀末に終焉を迎え，16世紀末に正八幡宮の社家においてのみ断片的に徴証が見られるだけとなる。つまり，15世紀以降，石清水八幡宮寺が別宮を含めて南九州とどのような関わりを持ったのか不明な点が多かった。

ところで，2013年に刊行された『鹿児島県史料旧記雑録拾遺記録所史料１』に収録された「史館調」48号に「泉坊江被成下候知行目録之吟味」という史料があり，この「泉坊」が石清水八幡宮寺の坊の一つであり，上述の課題解決に迫ることができる可能性があることに気付いた。

そこで，関連史料を改めて検討し直して，中世後期以降の石清水八幡宮寺と島津氏との関係の一端を以下に素描してみたい。

天正12年（1584）３月15日，石清水八幡宮寺の栗本坊春乗が「島津殿其外国之大名小名衆」等の檀那を泉坊宥純へ金子５両で売り渡した（『唐招提寺史料第１』194号）。これが泉坊が島津氏と関係を有した始まりであった。

これ以降，泉坊の関連史料は18世紀の初頭まで島津家側の史料に断片的に見られる。そこでの泉坊は島津義久・家久等のために，神前において武運長久・国家泰平等を祈念して不動護摩供等の祈祷を行っている。祈祷が終了すると泉坊は終了証明書である巻数を提出し，御札・御香水・煮紙子（『鹿児島県史料旧記雑録後編２』511号）・牛王（『鹿児島県史料旧記雑録追録２』342号）等を島津家に贈った。また近衛信尹の使者を勤めて家久のもとへ下向したりもしている（『鹿児島県史料旧記雑録後編４』1043号）。

このような動きは泉坊と島津氏だけのものではなかった。泉坊等の石清水八幡宮寺の諸坊は宮寺への祈祷を取り次ぐ祈願所，また宿坊としても機能し，同じ頃諸国の大名達が大檀那となり，これらを経済的に支えた。具体的には橋本坊と足利氏，豊蔵坊と徳川氏，鐘楼坊と長曾我部氏，中坊と池田氏，太西坊と浅野氏等の事例が知られる（西中道「石清水八幡宮の祭祀と僧俗組織—放生会と安居神事をめぐって—」，椙山林継・宇野日出生編『神社継承の制度史』〈神社史料研究会叢書第５輯〉思文閣，2009年）。

慶長18年（1613）８月19日，泉坊は出水郡多田村の内百石を家久より寄進されている（『鹿児島県史料旧記雑録拾遺記録所史料１』48の１号）。宝暦７年（1757）頃には，島津家からは代わりに銀子が渡されていたようである（同前48の２号）。

同様の事例は，例えば伊勢神宮の御師御炊太夫や熊野那智大社の御師と島津氏など南九州武士との関係等が知られる。石清水八幡宮寺の場合も他の寺社と同じであったことがわかった。

このような坊人等と大名との結びつきは，石清水八幡宮寺の荘園支配が後退した後，中世後期から近世にかけての宮寺の経済基盤を考える上で重要な視点である（鍛代敏雄『戦国期の石清水と本願寺—都市と交通の視座—』17頁，法蔵館，2008年）。

18世紀半ば以降，泉坊と島津氏との関係がどのようになっていったのか，史料が無く詳細は不明である。　（主任学芸専門員　栗林文夫）

黎明館講演会要旨（平成26年２月22日）

「中世島津氏と「一揆」－地域比較の視点から」

東京大学史料編纂所教授　久留島 典子　氏

《「一揆」のイメージと「一揆」史研究》

「一揆」とは何か。そのイメージは江戸時代に作られた『画本信長記』の一向一揆図に見られるように，近世の百姓一揆，つまり権力に反対する運動・民衆の暴動というものが一般的であった。一方，『天狗草子』三塔僉議・三院僉議の図には僧兵らが集会を開いている場面が描かれており，これを「一揆」と表現する文書がある。中世の「一揆」のイメージはこちらであろう。明治以降の研究でも一揆といえば百姓一揆，民衆の結合や暴動であるというイメージが長く続き，武士達の結合はそれとは異なる政治組織，「党」であるという時代が続いた。このような研究史を大きく転換させたのが勝俣鎮夫氏の『一揆』であった。勝俣氏は，中世の一揆は反権力的組織に限定されないこと，一定の目的を達成するために作られた集団・組織であること，特定の作法・儀礼（一味神水）によって結ばれた組織ゆえに日常性を超えた問題を解決できること等を指摘した。このような提議をふまえ「一揆」の全体像を捉えたい。

《一揆の変遷》

院政期，組織体として「一揆」という名称はなかなか出てこない。最初に現れるのは寺社の一揆である。特定目的を達成するために一味する集団として現れ，処罰を伴う強制力を生み出す合意がなされた。

鎌倉時代の「一揆」は，組織体というよりは一つになっていることを象徴的に示す言葉であって，そう表現することで，ある種の圧力が生まれてくると考えられる。ただ，ここでも依然として寺院僧侶達の集団行動を示す場合が多い。

南北朝時代になるとこれが大きく変化する。まず組織体の呼称としての用例がでてくる。また武家の構成する多様な「一揆」が登場してくる。まず軍事的相互援助や日常的な精神の結びつきによって成立する軍団の一揆がある。一方平時の武家の一揆もある。「家」保持を目的としたもので，石見の益田家文書には，これを置文という形で表した史料もある。また，国人一揆，国一揆のように地域的な広がりを持った一揆も現れてくる。

室町時代になると，正長の土一揆に代表されるような土一揆が出てくる。民衆の一揆ということでは，すでに南北朝後期に荘園の百姓を中心とする一揆「庄家の一揆」があるが，これは荘園単位であり，都市で起きている土一揆とは若干性格が異なる。また一向一揆もこの時期に始まる。

戦国時代になると，戦国大名の支配下で新たな形の武家一揆が出てくる。また法華一揆や，さらには武家・農民・寺社等広い地域の全てを含むような惣国一揆も出てくる。

《島津氏と「一揆」》

島津氏「一揆」関係文書の特徴としてまず気付くのは，武士たちの結合を示す契状の残存が多く，それも室町期を中心に見られるという点である。他地域では南北朝期に多く見られる。また百姓の一揆と考えられるような文献史料はほとんどなく，武家の一揆が中心である点も他地域とは異なる。２点目として契状形式から起請文形式へ変化していくことが挙げられる。３点目として契状等が集中して現れる時期のあることが指摘できる。これは家督争い等をめぐる結合と関連している。これ以外にも，守護島津氏の関与が強いこと，被官のみが一揆する例が少ないこと，近世に向かって百姓の一揆のみが残存して前面に出てくる展開とならないこと等，他地域とは様相が異なっている。

《中世から近世への変化》

中世から近世にかけて，一揆的な要素の組み替えが行われたと考える。寺社の一揆は寺院の本末関係による序列化に，軍団の一揆は番・組による軍団編成に，平時の武家一揆は同名・本家・分家の序列化に組み替えられた。そして土一揆や一向一揆等領主へ要求・抵抗するものには「一揆」という烙印を押し否定したのではないか。近世社会は「一揆」が変質させられた要素を隠し持っていて，この構造が近世の平和維持に関係するのではないかと考えている。　（文責　調査史料室）

黎明館の催し物（平成26年5月～平成26年7月）

■黎明館企画展 3階企画展示室［常設展示入館料］

「～宝暦治水260年記念企画展～宝暦治水と平田靭負
—薩摩藩家老の系譜—」
期間：5月20日(火)～7月27(日)

「新たな国民のたから—文化庁購入文化財展—」(仮)
期間：8月5日(火)～8月31(日)

■黎明館講演会 2階講堂［無料・申込不要］

「鹿児島の仏像について」(仮)
日時：7月6日(日)　13：30～15：00
講師：文化庁主任文化財調査官　奥　健夫　氏

■学芸講座 3階講座室［無料・申込不要］

「薩摩藩家老の系譜」(企画展解説講座)
日時：6月1日(日)　13：30～15：00
講師：黎明館学芸課長　林　匡

「新しい時代の「宝暦治水」像」
日時：6月29日(日)　13：30～15：00
講師：黎明館調査史料室長　内倉　昭文

■エンジョイ黎明館

「歴史編（偶数月）・文化編（奇数月）」
［常設展示団体入館料・申込制：定員20名］
日時：毎月第2土曜日　5/10, 6/14, 7/12　10：00～11：30

■楽しい体験講座（定員30名，先着順）

「和装本づくりに挑戦しよう」
［200円・要電話申込］
対象：小学4年生から一般
日時：6月22日(日)　13：00～16：00
講師：黎明館職員

「薩摩焼をつくろう」
［300円・要電話申込］
対象：小学4年生から中学生
日時：7月20日(日)　13：00～16：00
講師：琴鳴堂　四元　誠　氏

「絵地図でめぐる鹿児島城下（屋外活動）」
［保険料（250円程度）・要電話申込］
対象：小学4年生～高校生とその保護者
（但し小中学生は保護者同伴）
日時：7月26日(土)　9：10～11：00
講師：黎明館職員

黎明館　ある日　ある時

敷地内の紹介

黎明館の東側，国道10号沿いの敷地にこの記念碑は建っています。第七高等学校造士館は，安永2年（1773）に創設された藩校造士館をその淵源としたことから，この藩校造士館を創設した藩主島津重豪の徳を称えて，昭和17年（1942）11月，旧造士館生等により建碑されました。碑の題字は島津忠重の書になります。

従三位島津重豪公頌徳碑（しょうとくひ）

人事異動（平成26年4月1日付）

【退任】	館長	髙山 大作
	副館長兼総務課長	松山 美朗
【転出】	専門員	生駒 進二（鹿児島地域振興局総務企画部課税課専門員）
	学芸専門員	新福 大健（知事公室政策調整課主査）
	主査	中間庭 綾子（監査委員事務局へ出向）
【新任】	館長	灰床 義博（鹿児島地域振興局長から）
【転入】	副館長兼総務課長	飯山 寿史（企画部統計課長から）
	専門員	種田 明人（総務部税務課専門員から）
	学芸専門員	市村 哲二（上野原縄文の森事業課文化財専門員から）
	専門員	松元 美幸（商工労働水産部経営金融課専門員から）

■常設展示入館料

一般310円(230円)　高大生190円(120円)
小中生120円(60円)
※　(　)内20名以上の団体料金
※　県内の小・中学校，高等学校，特別支援学校の生徒とその引率者については，教育課程に基づく学習活動として入館する場合は，事前申請によって入館料が免除されます。

休　館　日（平成26年5月～平成26年7月）

5／7．12．19．26　　6／2．9．16．23．25．30
7／7．14．22．25．28

期　間	黎明館以外各種団体主催の催し物	観覧料	お問い合せ先(敬称略)	
開催中　～5／6（火）	第4回　鹿児島白日会展	有料	白日会南九州支部	090(1873)4553
開催中　～5／6（火）	トリックアート in kagoshima 2014	有料	KTS企画開発室	099(285)8966
5／1（木）～5／5（月）	鹿児島モデラーズコンベンション2014	無料	同実行委員会	090(1167)5434
5／17（土）～5／25（日）	第61回　県美展	有料	鹿児島県美術協会	099(223)0758
5／28（水）～6／1（日）	日本風景写真協会鹿児島支部写真展	無料	日本風景写真協会鹿児島支部	099(256)1610
6／7（土）～6／15（日）	第32回　南日本女流美術展	有料	南日本新聞社事業部	099(813)5053
6／19（木）～6／22（日）	平成26年度九州高文連美術・工芸，書道，写真展，鹿児島大会	無料	県高文連(鹿児島商業高校内)	099(247)7171
6／27（金）～6／29（日）	鹿児島学生書道連盟展	無料	同代表	080(5268)3413
7／3（木）～7／6（日）	第52回　南日本七夕書道展	無料	南日本書道会	099(223)5226
7／12（土）～7／20（日）	第23回　MBCハンドクラフト展	有料	南日本放送事業部	099(254)7112
7／19（土）～8／24（日）	岩合光昭写真展「ねこ」「いぬ」(仮)	有料	南日本新聞社事業部	099(813)5053
7／26（土）～8／31（日）	世界恐竜展～九州初上陸！謎の肉食恐竜がやってくる～	有料	南日本放送事業部	099(254)7112

※掲載内容は5月1日現在のものです。催し物の内容・日程等は，変更になる場合もございます。

黎明　Vol.32.No.1（通算123号）

発行年月日　平成26年5月1日
編集・発行　鹿児島県歴史資料センター黎明館
所　在　地　〒892－0853　鹿児島市城山町7番2号
Tel(099)222－5100(代表) Fax(099)222－5143
ホームページアドレス　http://www.pref.kagoshima.jp/reimeikan/